

片思い中のマフィアが事故で媚薬をキメ
られたので、俺の身体で発散してもらう
ことにしました

体験版

次期リーダー硬派マフィア×攻めに片思い中健気闇医者

受け：ルジェ

攻め：ディタ

要素：マフィア、媚薬、前立腺責め、結腸責め、連続絶頂、潮吹き、絶倫

これは、抗争中に起きた事故なんだ。だから彼は悪くない。今から俺とすることは、全部ただの治療行為だと思ってくれたらいい。

「大丈夫だから、変な女相手にするより俺の方がいいって」

「だけとお前...」

「俺のこと信じてよ」

苦しそうな顔で俺を見つめる彼は、自分の一大事でも俺を大切にしてくれる。そんな彼の気持ちを無下にしている気もするけれど、俺からしたら人助けにもなって、自分の望みも叶えられる絶好の機会だ。この際、事故的な一回でもいいじゃないかと思っている。彼とヤッタという既成事実が、きっと今後の俺の支えになるだろう。

「バキバキのこれ、早くどうにかしよう？」

告白したって、脈はない。だったらせめて、非常事態に乗じて身体だけでも、なんて。

医者立場を利用したあさましい計画が、どうか彼に伝わりませんように。

小さい頃に孤児になった俺とディタは、それぞれ別の組織に育てられた。彼は地域では名の知れたマフィアに、俺はその傘下の闇医者。物心がついて治療の手

伝いをするようになった時から、頻繁に怪我をして運ばれるディタとはよく話すようになった。育った境遇に似た部分がある俺たちは自然と仲良くなり、お互いに成長して、ディタが小さいチームを持ったときも、少し大きな役職に付くことになったときも、こっそり2人でお祝いしたりした。

そして明日、無事に抗争を治めたら。おそらく彼は、次にこのあたりを統括する新しい組のリーダーになるだろう。

「昔は俺より小さかったディタが、とうとうここまで出世したか」

「いつの話をしてるんだ。それに、まだ出世してない」

「きっとするよ。俺には分かる」

お祝いにしろ、ただの食事にしろ、2人きりで会う時にどこかの店で会うことはない。命を狙われる彼の安全のために、決まって俺の家での密会になる。もちろん、闇医者見習いの家が豪華なわけもないから、今日も小さい机の上に、安いことが魅力のワインを並べて談笑するだけ。ささやかだけれど、これが俺にとっては一番幸せな時間だ。

「そういうルジェは、腕を上げたのか？いい加減見習いじゃなく一人前になれよ」

「なっ！？が、頑張ってるよ！縫合も上手くなってる！」

「どうかな？ルジェに最初に縫われたところは、今も痕になってるし」

「先生に縫われたところだって痕にはなってるだろ！」

たくましくなった腕にも、割れた腹筋の隣にも、彼の肌には様々な傷がある。でも、傷だって男の象徴の一つだ。それに、ちらりと見える肌からも伺えるほどの筋肉や、今や俺より十数センチは高い身長、危険と隣り合わせの男社会で揉まれたおかげで洗練された顔も、全てが男らしくてカッコいい。地下の医院で偏屈な先生と二人三脚の俺とは、全く違う成長を遂げている。正直身内のひいき目を差し引いても、相当男前だとは思う。

そんなディタに、俺はこっそり片思い中だ。だけれど俺みたいな根暗な闇医者に愛を告白されたところで、ディタからしたら迷惑だろう。だから今は、先生の元でもっと医療を学んで、彼に信頼されることが目標だ。いつか俺も、困ったときにはルジェのところに行ったら安心と思ってもらえる存在になりたい。

「じゃあな。明日は頑張れよ、次期リーダー！」

「ああ。嬉しい報告もってくるよ」

見送りの時には小さい頃から習慣になっているハグをして、扉を閉める彼に手を振る。ここまでがいつもの密会となんら変わらなかったから、次の日にぐったりしたディタが部下に担がれて病院に来た時には、全身の血が凍るほど肝が冷えた。

「なっ...！？何があった！？ディタ、しっかりしろ！」

「そんなに心配しなくていい。ちょっと打たれただけだ...」

「何を！？銃！？」

「いや、薬です」

荒く息をしながら多量の汗をかくディタをベッドに運び、まずは腰を下ろさせる。彼の部下から話を聞いたところ、抗争そのものはディタ側の組織に軍配は上がったものの、最後の最後でディタが狙われたらしい。その時に打たれた薬の注射器を受け取ったが、見ても特に変わった表記はなく、俺は首をかしげた。

「何を打たれたんだ？今のところ意識ははっきりしてるみたいだけど…」

「ええ、っと、俺らにはちょっと分からんというか…。兄貴はとにかくルジェさんのところに行けばどうにかなるって」

「ま、まあそりゃ医者に行こうとは思うよな」

なんだかしどろもどろな物言いの部下にも、特に何も言ってこないディタにも少々普段との差を感じるものの、俺はとにかく慌てていた。なんせこの地下医院、現在先生が不在だ。しかもかなり懇意の人が峠をさまよっているので、いつ帰ってくるかの見込みが立っていない。つまり、ディタの治療には俺があたるしかない。

成分も分からない薬を打たれた彼を、どうやって治療したらいいんだ。そう思うけれど、できないとは言っていない。覚悟を決めた俺は、彼の部下に指示を出す。

「分かった、ディタはここで預かる。絶対なんとかするから、治療がひと段落したら連絡する。アンタは組織に戻って、ディタのこと報告しておいて」

「でもルジェさん、もしかしたらこれから」

「うるさい。ルジェが何とかするって言ってんだろ。お前は戻ってろ」

「でも兄貴——」

「でもでもうるせえ。お前、俺とルジェが信じられねえのか」

「いや、ルジェさんはともかく、兄貴に関しては心配しかないですよ。もしも兄貴が暴走したら、ルジェさんが」

「...努力はする」

「努力でどうにかなるとは思えませんが...」

リーダー想いの部下は、まだ彼の元を離れたくないようで、ちらちら俺を見ながら心配そうにディタと小声で話をしていた。けれどしぶしぶ納得したのか、何かあったらすぐ連絡をする約束をした後、地下医院を去っていく。

ただ、ディタを託されたはいいものの、どうやって回復に持っていくのかさっぱり検討がつかない。とにかく水分補給か？毒だとしても有効だよなと、比較的どんな毒にも効く解毒剤と点滴を用意する。

「よし。ディタの意識があるうちが勝負だな。とにかくこの解毒剤を飲んで、点滴を打って——」

「...そういうのはいい」

「は？何言ってんだ、もっと薬が回ってからじゃ、っておいおいおい！??」

だけれど俺がせっかく治療の準備をしたにも関わらず、なぜかディタは俺の腕を引っ張って、強引にベッドに押し付けてきた。何してんだコイツ、薬でおかしく

なってるのかと目を白黒させていたら、なんとキスまでされて頭も真っ白になる。

「なっ、ディ、っ、ッッッ！！！？！？」

いくらおかしくなっているとはいえ、キスされるとは思っていなかった。なんなら、引かれた服の裾から内側に手が入ってきていることにも驚きだ。そして俺はここで、彼に打たれた薬の種類を察する。

ああ、そうか。言われてみれば、今回の抗争相手は色を売る商売もしていると言っていたな。だったら、きつめのラブドラッグ的なものを打ち込まれた可能性はある。元々向こうは抗争の負けが見えていたから、これを打ってディタの愛人か恋人を見つけて人質にでもしようと思ったのかもしれない。そんなもので勝敗が変わるとは思えないけれど、少なくともディタの弱みは握れるだろう。そう思えば、ある程度薬の予想がついている彼の部下が、ディタと俺の心配をしていたのも納得だ。

だとすると、地下医院に真っ先に赴いたディタの判断は懸命だ。医者に行くのは当然だし、そこで最悪俺を抱いたとしても、とりたてて彼の弱みにはならない。でも、俺が諸々の事情を納得したあたりで、ディタがはっとして俺を突っぱねた。それから片手で額を押さえて、もう片手で自分の服をきつく掴む。

「っ、悪い！お前にこんなこと...！」

「ディタ、大丈夫、俺は大丈夫だから」

「大丈夫なわけがあるか！一人にしてくれ、そうすれば」

「一人になんかできるわけない」

だけれど、俺の安全を優先してくれても、自分の気持ちは苦しくなるばかりだった。取り乱した彼も、苦しそうな彼も、正直見てられない。だから取られた距離を詰めて、ディタを抱きしめる。

「薬…。興奮剤か、催淫剤か何かなんだよな？だったら、俺が収まるまで手伝うから」

「ダメだ、今でもこんななのに…。もっと時間が経ったら、ルジェに何するか分かんねえ…」

自分の腕の中で、体格に似合わず震えているディタを見ると胸が苦しい。こんな時まで俺の心配をしてくれる彼は優しいけれど、俺だってディタを助けたい。愛する彼の役に立ちたい。医者としてもそうだけれど、ただ純粹に彼を思っているからこそ、この身体を使ってほしかった。

「大丈夫だから、変な女相手にするより俺の方がいいって」

「だけとお前…」

「俺のこと信じてよ」

これが事故なのは分かっている。でも、どうせ俺の恋は叶わない恋だ。だったら治療行為だと割り切って、抱いてもらうのも悪くない。ディタは嫌だったとして

も、俺にはありがたい思い出になる。だから理性と戦う彼に踏ん切りがつくように、ズボンを押し上げる熱を撫でた。

「バキバキのこれ、早くどうにかしよう？」

なんなら、ベルトにも手をかけた。そこで落ちてくるのは熱い呼吸音だけだったのを良いことに、俺は一つ一つ、丁寧に彼の服を広げて彼の熱へと手を伸ばす。ただしそこで俺の額を打った昂りが想像以上に荒ぶっていたので、自分でけしかけておきながら、これをどうにか出来るのかとひよったのは内緒だ。

「ん、ぐ...ッ！」

2発目の濃い精液を口の中で受け止めた俺は、出るとわかっていても再びむせこんだ。気持ち的には飲んでやりたいところだが、正直好きな人の物だとしても飲めたものではなかったので、近くのペーパータオルを引き抜いて、乾いた紙の上に吐き出す。

「すごい、濃い、かも」

えほ、と軽くえづいてから、たたんだ紙で口の周りも適当にぬぐう。しかし俺としては既に顎が外れそうだと萎えているのに、ディタの性器は未だに固いまま

だ。少々出したところでは、全く衰える気配がない。190センチ近い身長と、大柄な体格の持ち主のディタでもここまでの効能を発揮するとなると、女性にでも打ったら大変なことになるだろう。やはり違法に販売されているだけはあると、薬の効果に感心してしまった。

しかしながら、考え事をしている場合じゃない。彼を助けるためには、まだまだ射精を促す必要がある。でも口で抜くとして、あと何回やったらいいんだとうろたえながら彼の熱を握った。

「なっ、なんかまだまだ元気って感じか？ちょっと楽にはなってる？」

「...足りない」

「え？」

「こんなんじゃ全然足りない」

「え、わ、わっ、ちょ、ディタ！？」

しかしながら、薬で理性が削られているディタからすると、俺のぬるいフェラでは全く満足できなかったらしい。ベッドの上で大人しく座っていただけの彼は、しびれを切らして俺を押し倒した。その流れでキスされたものの、力で敵わない俺はされるがままだ。

「んっ、う、ディ、タ、っ、んう、んっ、んんっ！」

舌まで入ってきた時には、かなり濃厚なキスまでするんだなと驚いた。おそらく、彼の暴走を止めるにはできるだけ精液を出した方がいいから、キスはするだ

け無駄だ。それはディタにも分かっていると思うけれど、思考力や理性が性欲に負けている可能性はある。なんならキスが終わったら、俺のシャツが左右に乱暴に引っ張られたせいで、シャツのボタンがはじけ飛んだ。衣類としての機能を失った布が広がって、俺の胸を隠すものがなくなる。普段のディタなら考えられない暴挙に、俺はカチカチに固まってしまう。

「きれいだな…」

「綺麗、かな？」

「ああ、ルジェは綺麗だ」

けれど、半分恐怖で身動きが取れない俺とは逆に、ディタはうっとり息を吐いて俺を撫でる。その目は半分うつろで、薬の影響が深刻なことが目視で分かった。だから多分、俺の身体が綺麗に見えるのも幻覚だと思う。

だって俺の身体は、どこからどう見ても男の胸、男の腹でしかない。ディタと比べたら傷はないと思うけど、男らしく引き締まった体躯じゃないし、むしろ貧弱だ。骨が浮くほど細くもないけれど、かわりに筋肉も最低限しかない。ディタと美に対する価値観で話し合ったことはないのだけれど、この身体に美しさは備わっていない気がする。それを判断できないくらい、ディタがぶっ飛んでいるのだろう。

ヤバいなコイツ、本格的に大丈夫なのかと思いつつも、殴られたりはしなかったのひとまず好きにさせた。変に抵抗しないほうがいいのではないかと判断して、大人しく身をゆだねる。けれどそうやってじっとしていたら、テキパキと下

の衣類も脱がされてしまった。その時俺は、てっきり入れられる孔にさっさとブチ込む流れなのだと思った。

なのに俺の下半身に近づいたのはディタの性器ではなく、彼の顔だったから、慌てて足を閉じて彼を押し返す。

「いいいい、いやっ、何してんの！？顔近いって！」

「近づけれないと舐めれない」

「舐める！？俺はいいだろ、薬関係ないんだから！」

「舐めたい…」

「や、だ、舐めなくていいっ！ま、待って、や、あ、ああっ！」

だけれどグイグイ来るディタは、舐める必要性が全くない俺の熱に顔を近づけてくる。力勝負で敵わない俺は、手をはぎ取られてしまえばできることはない。むしろ彼の方に手を引かれて、股間と口が深く密着して焦る。

「ふあ、あ、ああ、熱い、ディタっ、だめ、だめえっ！」

「んんん…」

「〜〜〜ッ！！？やあゝ、ふ、かい、それっ、あ、あ〜〜〜っ！！」

しかも不思議なことに、ディタのフェラは尋常じゃなく気持ちよかった。もちろん好きな人に舐めてもらっているという、心理的な側面がプラスされているのはある。それを加味しても上手い。そもそも他人から舐められたことがないので比較はできないけれど、とにかく感じて逃げたくなるくらいには気持ちよかった。

じゅうう、と吸い上げながら奥の方まで飲み込まれていくと、一気に射精まで持っていられるようだった。ジタバタと足が暴れる。逃げようと腰が彼とは反対の方に動いた。でも腕を引かれて戻されて、逃げた仕置きと言わんばかりに口を上下に動かされる。そんなのダメだ、どんどん気持ちよくなるからと足を閉じて抵抗したら、ネロネロと先端をねちっこく舐められて、ガクガク腰が揺れた。

「ひいいいいッ！うああ、あ、ゃ、だ、そんなん、あ、ああああっ！」

「気持ちいいか？」

「ッ！！ッ！！」

ディタからの質問に、声も出せずに頷く。いやいや、俺が良くなっても仕方ないと思うのに、なぜか嬉しそうなディタが目に入ったので、色々と諦めた。ダメだ、こうなったら気のすむまで好きにさせてやらないと、次のステップに進めない。しょうがない。ディタが舐めたいと言ってきかないから。これは俺が一回イクまでは止められないかもなと、腰がとろけそうな口淫を受けながら腹を括った。

「はあ、あ、あ、も、ディタあ...っ！い、く、俺、も、出ちゃうう...！」

「ん」

「やっ、ん、じゃなくてえっ！く、ち、口、離し...っ！」

「んん」

「こ、こら、我儘言うなっ！はう、い、医者言うこと、聞い、ッ、あ、あああ
ああっ！！？」

ただ、射精そのものは生理現象だと割り切ってはいたが、ディタは俺がイキそうなのに口を離してくれなかった。ふざけるな、なんで舐め続けているんだ。俺はディタの口に出さないように気を遣っているのにと、必死に足をばたつかせて抗う。それを許さない彼は、思い切り深くまで俺の熱を咥えこんで、ぎゅううと吸い上げた。あまりにも強烈な快感に、ビクンッと大きく身体が跳ねる。そして俺が硬直したところで、一度息を整えたディタから激しく吸い付かれたら、もう我慢は出来なかった。

「やあああっ！！ああああダメダメ、も、イク、イクイクイクっ、ッ、ああああッ！！」

しかも彼のひどいところはもう一つあって、逃げたがる俺の腕をずっと押さえ続けるせいで、自力でディタから遠ざかるのを許してくれなかった。まずい、早く彼の口から引き抜かなければと思ったのに、全く身動きが取れない。なんなら、出している途中も亀頭の周辺を舌で舐められて、ぞわあっと腰一帯が良くない快感に侵された。

「はううう...ッ！！？んや、あ、だめ、イッてる、からあ...！やっ、ディタ、だめ、だめっ！」

「ふふ」

「〜〜っ！！はう、ん、んんっ！はあ、はあ、だ、め、と、止まなくなっ、あゝっ、ああ、んん〜〜っ！！」

妙に射精を引き延ばされるせいで、ガクンと腰が大きく震えては、ベッドから浮いて、ディタの喉に先端を擦りつけてしまった。嫌なのに、ディタに苦しい思いをさせたくないのにと首を振っても、念入りのフェラは長く続いた。最終的に腰だけじゃなくて太ももまで震えて、膝すらガクついて、俺が泣き始めたあたりでようやくディタの口が離れていく。

「ひい、あ、あああ、も、出ないいいい...ッ！ゆる、し、て、も、あゝ ああうっ、っひ、ひう、あ、あゝ ッ！！」

「...さすがにいじめ過ぎたか」

「んんんうっ！」

名残惜しそうに最後に先端をひと吸いされたら、ぴゅくりと少量の精液が出てきた。それが恥ずかしくて全身を真っ赤に染めて震えていたら、俺が出した精液が、ディタの口から俺の孔に向けて吐き出されていた。そこでようやく、自分の役割を思い出す。

そうだった。本日の俺は、ディタの性処理係。孔としての役目を果たさないで何をしているんだと、気持ちを入れ替える。

やはりディタも男なのだから、入れて出すことにロマンは感じるだろうし、最も手っ取り早く薬を抜くには俺に入れるのがいいだろう。そして本来、孔があると言っても男に入れるのは大変なのだが、俺は例外だ。なんせ日ごろからディタに抱かれる妄想をして自慰にふけているので、後ろもけっこうほぐれている。掘

り下げて言えば、昨日ディタが帰った後もオナった。何なら玩具も使った。だから、入れる側の準備はほぼ出来ていると言っていい。

「あ、あのさ？濡らしてくれたら、多分すぐ入ると思う。これ、中に塗って...！」

「...はぁ！？なんでお前、指が」

「えっ、な、なんでって言われても」

俺の精液と彼の唾液で濡らすのも悪くはないが、時間が経てば乾いてしまう。だから近くの机にあったワセリンを手にとって、自分で中身を取り、そのままワセリンを絡めた指を入れた。けれどなんのためらいもなく準備をしたら、ディタが目を開いて仰天していた。そのまま手首を掴まれて、動きを制限される。

「おいおいちょっと待て。なんか塗ってたけど、すんなり指が入るのは変だろ。どうなってんだ」

「や、だから濡らしたらすぐ入るって言ったじゃん！」

「濡らしたらすぐに入るってのが、まずおかしい。誰かのハメたことあんのか、ここに」

「誰のもハメてないよ！そんな相手いないの、ディタの方が知ってるだろ！？」

「じゃあなんでぬるっと指が入っていったんだよ。この孔処女なんだろうが」

「ええ、っと...？そ、そんなの、知識でどうとでもなる！医者とは常日頃からの心がけでこうなるもんなの！」

ただし、驚きの後は厳しい質問攻めにあった。でも俺が逆の立場だとしたら、確かに気にはなれると思う。同じ男だからこそ、ディタも不思議だろう。

とはいえ、ディタをオカズに日々日々オナっていたから開発済みですとは言えない。言えるわけがない。正直に言ったら絶対に引かれるし嫌われる。だから俺は、咄嗟に苦しい言い訳をした。けれどもそんな理由で納得はしてもらえず、盛大な舌打ちを返された。

「医者だったら緩いわけねえだろ、ふざけんな」

「んあ、あううっ！！？」

しかも若干怒っているディタは、俺の指が入ったままの孔に自分の指を入れてきた。それから手首を引っ張って、俺の指を乱暴に引っこ抜く。

「もう2本も楽勝だな。随分お利口な孔だ」

「ん、あ、あ、だ、だからもう、入れていいから」

「濡らさないといけないんだろ？奥まで塗らせろよ」

「くぅ、うううっ！！？」

自分の指で自慰にふけるとときには、次にすることも自分で考えるし、力加減も調節する。でも人の指はそうはいかない。いくら濡らしてもらっているとはいっても、感触が別物で、思わず腰が浮く。

それに、ぐにぐにと中を弄られるうちに、前立腺を見つけられてしまった。明らかに反応のよくなる場所を発見したディタは、しつこいくらいに同じ場所を擦ってくる。それに律儀に感じてしまう俺の身体も憎い。

「んあっ！あ、ああ、だ、め、そこ、ッ、あ、も、そこばかり、しつこいい...っ！」

「そんな声出してるくせに。ダメじゃないんだろ、ほんとは」

「んっ、う、うううっ！や、感じる、感じ過ぎちゃ、う、ううんっ！っあ、ひ、中、も、そんなにしないでえ...っ！」

「もっとエロくなれよ。俺の指で」

「はふっ！！？っあああ、あ、やっ、あああうっ！！ひい、いい、だ、め、も、あ、あああ〜〜〜ッ！！！」

職業といかつい見た目のせいで、最初に会う人はディタのことをまず怖がる。ただ、彼は人情に熱いタイプだし、少なくとも俺には優しく接してくれていた。だからこそ、こうやって少し荒っぽい扱いをされて、強い言葉を向けられるのが新鮮だ。それが逆に、俺の興奮材料になっている。

中を2本の指でバラバラに引っかかれて、何度も何度も前立腺を押し込まれた。やめてと言っても止まることのない指が、俺を追い込んでいる。気持ちよくて、きっと他の人よりは感じやすくなっている場所が疼く。

ただし、今日に関しては俺が良くなることにあまり意味はない。ディタの薬を抜くためには、俺がイッたところで彼への影響は皆無だからだ。なのにイキそうに

なっているんだから、医者としても半人前、性処理係としても役立たずで呆れる。

「んあ、あ、ね、え、待って！もっ、俺はいい、いいからあっ！」

「俺がよくない」

「んんッ、だ、め、ディタが、ディタが出ないと...っ！」

本当は俺に、彼をトロトロに出来る性技があればよかったんだけど、あいにく持ち合わせていない。そうすると、彼に任せていては、ディタが良くなる前に俺が気持ちよくさせられて終わりになりかねない。

だったら強行突破だと、張り詰める彼の熱を握って、そっと撫でて、それから自分の臀部を擦りつける。

「も、入れて...！早くコレ入れてえっ！」

「そういう誘い方も教わったのか？誰に習った？」

「教わってない...！」

「ああそうかよ。嘘が下手だな、ルジェ」

「やあうっ！！？」

でも良かれと思って彼を誘ったのに、返ってきたのは舌打ちだった。しかもあらぬ疑いをかけられて悲しい。そんなことはない、ギリギリ誘ったことがあるとカウントされるのは妄想のお前だけだよと、言えもしない真実を隠す。

ただ、こうして隠し事をして、それを厳しく追及するように乱暴に愛撫されるシチュエーションも想像していた。それが現実になってしまうと、俺も歯止めが効かなくなる。しかもディタの言葉や指使いは荒々しいのに、中のヒクつきが激しくなっていた。だって、俺を睨むように見下ろすディタが、思った以上に良くて。普段は控え目に微笑む彼が、サディスティックに俺を見て口の端を上げる表情が様になっていて。その顔を見るだけで、腹の中がゾクゾクする。

「はぁあっ！あ、や、あ、も、イク、やっ、お尻でイっちゃうう...ッ！！」

状況はどうあれ、ディタに愛撫されている事実は変わらない。俺にとってご褒美でしかない現状で、感じない方が無理だった。しかも乱暴とはいっても、感じるポイントは外してくれないし、なんなら俺の反応を見て、やり方を変えてきている。

グリグリと押し込まれるより、トントントンとリズムカルに押される方が好きなこともきっとバレた。2本の指で挟まれて、ふにふにと揉み込まれた時に腰を浮かせたせいで、しつこく同じように責められた。なんでだよ、なんでこんな短時間で、俺の好きなやり方を見抜いてしまうんだと首を振る。それが逆にディタを煽るのか、息を吐くような笑い声が漏れていた。

「何を我慢してるんだ？イきたいんだろ？」

「ッあ、うう、で、も、でもおお...っ！」

「往生際が悪い」

「うあ...ッッ！！？」

こんな風に感じることはかりされたら我慢できない。嫌だ、俺がイッたって仕方ないのにと、耐えるために目をつむった。だけれどそのタイミングで、きゅっと乳首をつねられてしまう。意識の外にあった場所への刺激は、俺の絶頂の引き金には十分だった。

「く、あ、だめだめ...ッ！あ、ああ、イク、う、んううううっ！！！」

ガクガクと腰から下が揺れて、それからビクンと大きく全身が跳ねる。体中を痙攣させながら、ぎゅううっとディタの指を締め付けるのを押さえられない。

ああ、イッた、イッてしまったと目を開けたら、自分の熱の先端から、とろりと少量の前立腺液が零れるのが見えた。

「んあ、あ、ああ...！やば、俺、お尻でイッちゃった...！」

恥ずかしさから、身を隠そうと軽い内股になる。何か許しを得たかったのか、ディタの腕を掴んでいた。きゅ、と近くにあった腕を握って、呼吸が落ち着かないまま彼を見上げる。

けれど俺は、自分がイッたことを揶揄されるのは覚悟の上だったのに、ディタは怖いくらいにギラついた目で俺を見ていた。なにも言ってこないのも怖くて、ひゅんと身を縮めてしまう。だけれど俺が目を泳がせていたら、思いのほか優しい力で抱きしめられて混乱した。

「え、あ、ディタ...？」

「どういうことなんだ...。俺のルジェが...、俺のルジェなのに...」

「ご、ごめん、ディタがよくなんないといけないのに、俺ばかり」

「別にイッたのは怒ってない。だから聞かせろ。誰なんだ？誰がお前をこんなにいやらしい男にした？」

でも体を離れたディタから、少し前と同じ質問をされて嘆きが深まった。まだ勘違いしてるのかと言いたい。俺のこの体たらくは、誰のせいでもない。強いて言うなら弄りまくった自分のせいか、妄想上のお前のどちらかだ。証明が難しいけれど、俺は誰からも手は出されていない。

「いっ、いつまで疑ってんだよ！？俺、誰にもヤられてないってば！こんなことされんのディタが初めてだって！」

「嘘つくな。初物がここでイクのか？」

「ふあうっ」

けれども俺を疑うディタには、言葉で言ったところで通じない。しかも中が感じやすいのは間違いなく、かつイッた直後の前立腺は更に敏感だ。再び指を入れられたら、口からとろけた声が出た。いやらしい声を出した俺を見るディタからは、疑惑の目線が飛んでいる。

分かる、分かるよ。普通、初めてでここまで無茶苦茶されてイクわけないってことくらい。でも感じちゃうんだから仕方ないだろ。中イキできるまで、俺が自分

で開発しちゃったんだよ。だから、頼むからそんなにコリコリしないでくれ。前立腺をディタに擦られたら、それだけでまたイキそうになる。

「んあ、あっ、や、だめ、そこだめっ！っんん！あ、か、んじ、過ぎて、またイッちゃうからあっ！」

「ダメだ。白状するまでやめない」

「ッ、だ、って、ホントに違う...！うう、も、やだ、いじめないでえ...！」

もう言っても聞かないなら、体当たりでの交渉に出るしかないと思った俺は、彼の動きを止めるために抱き着いた。もちろん力で劣る俺が押さえられるわけもないが、これで少しはディタも冷静になるだろう。

そう思って彼と密着したのに、俺の頭に当たる胸のあたりから、ものすごい鼓動を感じた。尋常じゃなく早く大きい心臓の動きに、むしろ俺の顔が真っ赤になる。なんでこんなにドキドキしてるんだ？薬の影響か？だとしたら、これほど心臓を掻き立ててたら、急がないとコイツ死んじゃうぞと、慌てて彼を見上げる。

「ディタ、お前本気で早く治療しないと」

「...かわいい」

「ん？」

「かわいいな、ルジェ」

「っ！！？？？」

しかしながら薬がよく回ったディタに、冷静さが戻るわけもなかった。心配して声をかけると、なぜか嬉しそうに微笑んで、俺に頬ずりしてくる。それから軽く耳と首の間くらいにキスをして、うっとり俺を抱き上げるディタがかっこよくて、今度は俺の心臓が高鳴った。

そして不思議なもので、快感と感情は連動しているのか、気持ちの興奮は伝染する。ぞわっと腹から生まれた快感は、一気に脳まで駆け上がってきた。マズいかも、と思った時にはディタの指を食いしめた中が震えていて、俺は必死に彼にしがみついていた。

「や、嘘、こんな...っ！？ああ、だめ、なんっ、ん、んんゝ～～
～ッッッ！！！？」

ディタに抱き着いたまま背を反らして、俺は2度目の中イキをしていた。しかも一回目と違って変なイキ方になったからか、じんと頭のとっぺんまで痺れる。ひく、ひく、と腹が波打って、次の言葉が出てこない。

「ふあ...！あ、あ、あゝッ...！」

「ルジェ...？今、また？」

「んっ、ご、め、ああ、やっ、これ、うう、ん、んんっ！はあ、はっ、あ、あゝ
ああ...！」

何度もイッたことを謝りたい。醜態ばかりさらした言い訳をしたい。なのに口が回らなくて、細かい喘ぎ声ばかり出てくる。それが嫌なのに、ディタが軽く指を動かすだけで、いともたやすく3度目の絶頂へと向かっていく。

「んあゝっ、あ、だ、め、今やだ、うう、ディタ、ディタあ...っ！」

「声がふやけてる。イキそうなのか？」

「ひ、ッ、あ、やだ、俺ばかり...！い、れて、も、ディタの入れてええっ！」

「俺が入れたくなったらな」

「くうあッ！あああッ！やあッ、それ、それ無理...ッ！！っひ、ッく、イクイクイク、も、ううううううっ！！」

ガクガクと身体を震わせて、情けなくも俺はイッていた。こんなにあっさりイカされてどうすんだよと思うのに、身体が言うことを聞いてくれない。いや、せめて多少くらい待ってくれたら話も変わるんだ。イッてすぐに弄るから。絶え間なく刺激を与えられるから。イッてもイッても終わらなくなるんじゃないのか。

「ひいいいっっ！！いああ、も、イッ、ッあああう！！はっ、っぎ、だめ、イッた、もお、もおおおっ！」

「やらしいなあルジェ。俺より先に何回イクつもりだ？」

「ふあ、あゝあ、あううっ！っ、あ、ひ、ごめ、なさ、も、いい、イクの、もううっ...！ああ、あ、っ、らい、から、イキ過ぎてえ...ッ！」

「そうだろうな。ここ擦ったら簡単にイッちまうもんな」

「んあああああ！！ああああダメダメっ！！も、もう許し、ッ、〜〜っあああうっ！！」

絶頂を重ねるごとに、一回ごとの間隔が短くなっていく。もちろん俺ばかりがイッても無駄なことは分かっていて、中が十分にほぐれた今、この愛撫になんの意味もないことも分かっている。なのに止められない。ぬりぬりと3本に増えた指から擦られて、ゆっくりと押し込まれるとどうにもならなかった。ぐうっと喉を反らして、あられもない声を上げてイッてしまう。

「うああああっ！！あはうッ！！ひっ、っぐ、あ、ああゝ あああ...！やあ、こ、んな、簡単にっ...！」

「嫌って言うわりには、気持ちよさそうに見えるけどな？」

「そ、う、気持ち、いい...！ディタの指、気持ちよくて...！俺もう、ダメかも...」

けれども、俺が何か余計な事を言ったのか、ずっとディタの周りの空気が凍った。すうっと肌を撫でる指先が急に怖くなって、びくっと肩がすくむ。なんだよ、なんだっていうんだよとうろたえて見上げたディタは、何かを睨むように俺を見ていた。それから、ようやく俺をいじめ倒した指が抜けていく。

「...気に入らない」

「な、なに、が...？」

「ルジェはかわいい。それは間違いない。でも、こんなにエロいのは聞いてないし納得できない。だから誰からヤられたのか、言わせるまで犯す」

「は、ううっ...！」

そして指のかわりに擦りつけられたのは、今度こそ正真正銘ディタの自身だった。浮き出る血管まで分かりそうなくらい昂るそれは、治療上いろんな人の恥部を見たから余計に分かるけれど、かなりデカいと思う。

元々俺が自分の中を慣らしていたのは、彼のサイズ感と似たようなバイブを入れるためだった。ただし本物は、私物の玩具以上のようだ。あれよりデカいのかよと、思わず感想を述べてしまう。

「す、すごい、おっきい」

「ああ？誰と比べてデカいって言ってんだ？」

「だから比べられないって！俺、初めてだから」

「まだ言うか、それ。いい加減聞き飽きたな」

「あああうっ！？」

けれど今日はディタの機嫌を損ねることが上手い俺は、この失言でまたしてもディタを苛立たせてしまったらしい。眉間にしわを寄せて、聞いたこともないくらい覇気のある声で迫られて狼狽する。いやいや、バイブ以外は入れたことがないのは本当なのにと首を振れば、ため息をついたディタが一息に熱を押し込んできた。ずっぷりとハマるそれは、入念に溶かされた内部を一気埋めつくす。入り口や前立腺の上、未知なる奥の方まで全てを擦られて、頭がビリビリした。

「くはあああああゝ あ...！！あ、は、はっ、はううう...ッ！」

「なあ、なんか出てきたぞ。まさか入れただけでイッたわけじゃないよな？」

「ん、んっ、わ、かん、なっ...！あ、あう、奥まで、届いて...！すごい、ディタあ...！」

「...はあ。ありえない、俺の知らないところで、ルジェがこんなにエロくなってたなんて。くそっ、エロい、エロ過ぎる...！」

「ううあゝ ャ！あ、ふ、深い、深すぎ、う、ううっ！！？」

びゅる、と自分の熱から射精したのは、俺もこの目で見た気がする。だけど中から生まれる快感が重すぎて、会話ができない。それなのに俺が落ち着くのを待ってくれないディタは、ガツンと奥まで腰を打ち付ける。それが頭をかきむしりたくなるくらい気持ちよくて、どさりとベッドに身体が倒れた。

「はあ、あ、あゝ ああっ！やっ、ま、って、待って」

「待てるわけがない」

「うんんんンゝ ンゝ っっ！！」

でも抱えられていた俺が前に倒れても、ディタの熱は抜けていない。むしろ犯しやすい体勢になったせいで、腰を抱えられて激しく彼の熱を動かされた。

なんだかんだ言っても薬が回っているのか、ディタの挿入はかなり荒っぽい。俺がシーツを噛んでいなければ舌を噛みそうくらい身体が揺れるし、腰を握る手

も、力が強くてちょっと痛い。だけどそれだけ余裕がないというのが、逆に俺を高ぶらせてもいる。

「はあ、ルジェ、ルジェ...！」

「ッ！ん、ん、ぐ、っ、うう〜〜〜っ！！？」

どぷりと内側に放たれた熱いものに、腹が震えた。入れて早々にイッた俺が言える立場ではないけれど、ディタもかなり早い段階で射精に至ったらしい。ただしなかなか終わらない射精だったから、腰を掴まれたままじっくり中を堪能された。

それにしても量が多い。これで3発目とは思えない。まだまだ萎える気配がないけれど、一体いつ彼の薬は切れるのだろうか。

「う、ああ、あ、で、てる、中にい...っ！」

「まだ、まだだ、まだ...」

「うあんっ！」

そしてあくまでディタのペースで進んでいくセックスは、俺に対する思いやりはほぼない。いきなり熱が引き抜かれたと思ったら、身体を仰向けにひっくり返されて、視界が変わったらすぐに挿入された。もちろん俺に馴染むまで待つことがあるはずもないから、再び激しく腰をぶつけられる。

「ふあ、あ、あ、っ、ん、んんっ！や、あ、は、んむっ！！？」

乱暴に扱われる身体が抱えられたかと思ったら、噛みつくようなキスが待っていた。息ができなくて苦しくて首を振る。それすら許さないと言わんばかりに頭を押さえられて、強引に入ってきた舌に口内を舐めまわされる。

ディタの舌も、指先も、何もかもが熱い。相変わらず心臓の鼓動も早いまだ。興奮がおさまらないディタは、満足いくまで口を吸ってから、自分の快感に集中した。その分俺は強引に犯されているわけだけれど、汗だくで俺を見つめて腰を振る彼を視界に入れると、ついドキドキしてしまう。

俺に全く構わないのが逆にいい。こっちだってイッているのに。それを微塵も気遣わずに弱い場所を抉られると、押さえられていても下半身が動く。ぐんと腰が反って、出すものもほとんどなくなった熱が震える。

「ああ、イッ、く、うう、ッ、あ、ああああっ！」

「イケよ。俺のでイケ」

「ふっ、ぐ、んんゝ んんううっ！」

地下の治療スペースに、病院とは思えない音が響いている。腰を打ち付ける音に、俺の喘ぎ声や息づかいも、全てが壁に染みこんでいくみたいで恥ずかしい。それでも手首を握られて、ぐっと目をつむって中出しされると、羞恥心よりも幸福感が勝つ。

あのディタが、全ての余裕をなくして俺に腰を振って、存分に種付けセックスを堪能している。その顔がかっこいい。見たことがない魅力に満ちている。

滾り続ける彼の頬に手を添えた。俺も最大級に男前なディタのことを、自分の目に焼き付けておきたい。

「何回でも、していい、からっ...！俺の事、好きにしてっ、いっぱい出してえ...！」

どうかもっと、俺を使ってくれと思った。役に立てるならなんでもしたい。多少乱暴だって構わない。だから思いっきり抱いてくれと思って、彼に伝えた。

けれども良かれと思つての発言には、舌打ちが返ってくる。今日のディタには、俺の思いやりがなかなか伝わらずに悲しい。薬の影響があるとはいえ、今の言葉のどこにイラついたのかが分からなくて少しへこむ。

「なんで怒るの...？」

「イライラする。かわいいのにエロいから。何も喋れないくらいぐちゃぐちゃになればいいのと思う」

とはいっても、思考力も普段の半分以下になっているディタとは、正しい会話ができない。部分的に分かるが、時々何を言っているか分からなくなる。あと、何も喋れなくなるほど犯されるのはちょっと怖いかもしれない。どうか言葉のあやであってほしい。

そう思つてびくりと身体をすくませると、彼は少し身を引いて、俺から自身を引き抜く。だけれどそれは終わりの合図ではなくて、次に向かうまでの短いインターバルだ。

射精を重ねたせいで疲弊した身体を起こされて、背後に座るディタに背中が密着する。それから脇の下に手を入れて、浮いた身体の位置を調整されたら、また下に落とされた。

「くは...！あ、あああうう...っ！」

自重で深くハマるディタの熱に、うっかりイキそうになる。それをどうにか堪えて、ぐ、ぐ、と全身を痙攣させた。こんなに簡単にイッていたらもたない。先が長い可能性もあるんだからと、大きく息をして快感を流す。

でもそんな我慢が、何度も通じる相手じゃない。背後から抱きしめられたまま、下から激しく奥を抉られたら、結局中ではイッてしまう。

「ひいうっ！うあ、あ、あうんっ！あゝっ、ふ、かい、まっ、あ、あああ
あっ！」

「んん...。ルジエ、俺のルジエ。もっとだ、もっと...」

「んあああああっ！！？あゝ ああ！だ、め、奥ダメ、入る、ダメなとこまで、ッ、んんんううっ！！？」

しかもしつこいくらいに奥を刺激されたせいで、俺自身も未開発の結腸まで届いてしまった。存在は知っていたけれど、指やバイブでは届かなかったから、その場所から送られる快感は未知だ。

ずぶんと結腸をこじ開けた先端が、ぬり、ぬりと奥でうごめく。その度に下半身が痺れて、頭のとっぺんまで快感が突き抜けていく。下から電撃でも流されたみたいに気持ちがよくて、俺は絶叫しながら何度も達した。

「ひぎっ、あ、あああああああっっ！！うううんっ！っひ、あ、あ、も、奥、奥やらっ、ああ、イク、イクっ、あああああ伊ッ、ッ、ンンあああッッ！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー